令和６年度学長裁量経費採択課題（詳細内容）

教職実践力向上重点研究費

公募分野	代表者		テーマ
3	保健体育講座	山下 純平	現代的教育課題を解決する小学校体育科のゴール型ハンドボールの教材の開発－日本およびドイツの初等教育学校との連携・協働による授業改善の成果より－

プロジェクト概要（1）	現代的な日本の教育では，国際的な比較から「自己肯定感や主体的に学習に取り組む態度，社会参画の意識等が国際的に見て低いこと」が課題（中央教育審議会論点整理，2015）とされ汎用的な能力である「コンピテンシー」の育成を現代的教育課題と位置づけ「主体的，対話的で深い学び」に向けた授業改善を求めている。 本プロジェクトの研究グループは，これまでに現代的教育課題の解決のために附属学校等の学校現場と連携して2019年に改訂された学習指導要領に対応した小学校体育科の授業の実践研究を進めることで教材を開発してきた。ゴール型ハンドボールの教材は，COVID-19の影響がありながらも全国規模の研究会での授業公開など附属学校等の協力により授業実践を進めることができている。しかしながら，その研究の成果については，子どもたちの運動有能感の高まりや，良い授業としての形成的授業評価，実践を経験した教員からの授業の進めやすさの評価などがあるものの「コンピテンシー」の育成の視点から子どもが「何ができるようになった」のかを調査する実証研究が不足しているため，教材の教育的価値を位置づけることができていないと考える。また，これまでの日本における体育の授業研究は「知識・技能」である「コンテンツ」の獲得に関する実証研究が主であったため「コンピテンシー」の育成からハンドボールの教材を開発した研究は，私が知るところこれまでに実施されていない。

プロジェクト概要（2）	「コンピテンシー」という概念は，OECDのDeSeCo（Definition and Selection of Competencies : コンピテンシーの定義と選択）プロジェクトで定義され「キー・コンピテンシー」として三つの軸が選択されている。そして「キー・コンピテンシー」は「文脈」という基底概念が存在していることが特徴であり，授業において「文脈」の中での主体的な学びやその解決に向けて「知識や技能は教師から子どもへと一方的に伝達されるものではなく，学習者や学習集団によって主体的に構成され，再編成されるものである」という構成主義的アプローチでの学習指導論の在り方が論じられるようになった（中村，2014，松田，2014，鈴木理，2014，鈴木直，2014）。 本プロジェクトメンバーの石川は，遊び研究の第一人者であるオランダの文化史家ヨハン・ホイジンガの「遊び論」にたって「（人間は）遊ぶ存在でなくなれば，極論，人間でなくなる」ことを危惧し，子どもを取り巻く社会環境の変化による現代社会の子どもの問題を論じ，その問題の解決策として「スポーツを通じてその集団の価値や役割，望ましい行動様式を学習していくこと」である「スポーツによる社会化」の有用性を主張している。そして「スポーツによる社会化」を学校体育の場で応用するために日本古来の伝統文化である伝承遊びに着目した。伝承遊びは「これまで日本の社会において，ごく自然に伝えられ，すべての子どもが集団で楽しく行っていた」とされる。日本の文化庁は「人間が理想を実現していくための精神の活動及びその成果」の側面から文化を考えている。そして「文化は人々の創造力の源泉である想像力を育てるほか，他者に共感する心を通じて，他人を尊重し，考えを異にする人々と共に生きる資質をはぐくむ」と教育的価値を述べている。 本プロジェクトは，文化庁が述べるこの「文化の精神性」に「スポーツによる社会化」の教育的価値を見出して，日本の伝承遊びが伝統文化として根付いてきたようにスポーツ（ハンドボール）が文化として根付いているドイツでの調査に研究の意義があると考えた。そして日本で考えた「スポーツによる社会化」を企図した教材をドイツの初等教育学校と協働した授業実践により改善点を見つけていくことで，グローバルな視点からの教育課題の解決を目指したい。 2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発目標（SDGs）」の達成は，グローバルな目標であり課題である。教育の分野では「4．質の高い教育をみんなに」を達成するために何ができるかを考えていく必要がある。そして，本プロジェクトの研究対象の体育科のボール運動系の分野は「3．すべての人に健康と福祉を」「10．人や国の不平等をなくそう」「16．平和と公正をすべての人に」に関連した学習の機会を「スポーツによる社会化」で提供できる可能性を秘めていると考えられる。このグローバルな目標に対しては，日本国内の調査だけでなくグローバルな視点からの調査により開発する教材の教育的価値を位置づける必要があると考える。

プロジェクト概要（3）	本プロジェクト調査対象国のドイツは，ハンドボールがスポーツ文化，教材として根付いている国であると考えられる。近代ハンドボールは「ドイツとデンマークで成立し，主に学校の中で発展してきた」（大西，2001）という報告や，ドイツトップリーグのブンデスリーガに所属するチームであるTHK Kielのリーグ戦平均観客数は10,285人（日本ハンドボールリーグ2022-2023シーズン587人，Bリーグ：バスケットボールリーグ2023-2024シーズン4,398人）であり，多くの国民がハンドボールを認知していると考えられる。そして，国際ハンドボール連盟のランキングでは現在1位（International Handball Federation, online）という背景を持つ国である。公益財団法人日本ハンドボール協会は，ドイツが国際基準において選手育成に成功している（Schorer et al.，2012）として，ドイツを参考にして小学生年代の特別なルールを導入している（Brand et al.，2009，p.36;公益財団法人日本ハンドボール協会，2015；中山，會田，2019）。このようにドイツにおけるハンドボールは，世界で最も歴史が深く伝統があり，国民の誰もが経験する学校体育の中で発展しており，小学生年代における効果的な育成理論を有する国であることから，その文化としての精神性を伝承し根付いていると考えられる。 また，ドイツでは「コンピテンシー」の育成においても「Bildung」概念の伝統から独自の位置づけがなされており「コンピテンシー」の用語は各州の学習指導要領に定着している（吉田，2016）。実践校のあるザクセン州の学習指導要領（2019年改訂）には「ゲームと遊び」の学習分野について「子どもたちは，ゲームのアイデアに基づく開かれた変化する状況から生まれる遊びの魅力を体験することができる。そして，個人的および社会的な貴重な経験を積み重ね，その上に中等教育の準備ができる。相互に合意されたフェアプレーのルールを認めることで，社会的な相互作用の中で寛容と受容の感覚が強化される」と「スポーツによる社会化」に関連する内容が「ソーシャルスキルの学習目標」として定められている。以上のことから，ドイツで得られる本プロジェクトで実施する教材への評価からは，日本では得ることのできない貴重な教育改善への示唆を得ることができると考える。 以上のことから本プロジェクトは，これまで本学が現代的教育課題の解決のために附属学校等の学校現場と連携して実践研究を進めてきた小学校体育科のゴール型教材であるハンドボールの教材をドイツのスポーツ文化の視点を含んだ改善を通じて「スポーツによる社会化」を企図した教育環境学的視点からその教育的価値を位置づけていくことで，現代社会に適合した教科内容構成を開発していくことを目的とする。 方法は，ドイツ及び日本の初等教育での授業実践による実証研究と実践に関わる教育関係者へのインタビュー調査である。

プロジェクト概要（4）	授業実践による実証研究では，前述した附属学校等と連携して研究を深めてきた授業を「スポーツによる社会化」を企図した教材として実施する。初回から3回目の授業における子どもの形成的授業評価と運動有能感，ビデオ映像によるゲームパフォーマンス分析によりゲームパフォーマンスの変容を明らかにするというこれまでの体育教育学の視点からの一般的な調査に加えて「スポーツによる社会化」の学習効果の実証である。現状では「学級力」（田中，2013）を援用して調査内容を検討していきたいと考えている。これについては，プロジェクトメンバー（山下：コーチング学，ハンドボールの教材構造論，石川：教育環境学，遊び文化論，鈴木：体育科教育学，授業研究論，縄田：運動学：球技教材開発論，西村：体育科教育学，授業実証研究論）で9月までに調査内容の検討を重ねていく。そして，ドイツと日本の子どもの学びの特徴を捉えていき，本教材でそれぞれ「何ができるようになったか」を明らかにすることで教育的価値を検討する。 インタビュー調査は，半構造化インタビューをドイツと日本それぞれで授業を実施した教師と参観した関係者に対して実施する。聞き取る内容は「ハンドボールの教材」に対するそれぞれの教育的立場による教育的価値，これまでの教材との比較による「ハンドボールの教材」の評価，改善点「ゴール型教材」を学習していくことに対する課題についてである。ドイツと日本それぞれの特徴を事例的に調査して，その共通点を見出すことで，教材の改善への示唆を得て教材開発への知見とする。 そして，研究論文を執筆し，国際的な評価が得られる学会誌へ投稿し，掲載されることを目指す。
研究の目的	これまで本学が現代的教育課題の解決のために附属学校等の学校現場と連携して実践研究を進めてきた小学校体育科のゴール型教材であるハンドボールの教材をドイツのスポーツ文化の視点を含んだ改善を通じて「スポーツによる社会化」を企図した教育環境学的視点からその教育的価値を位置づけていくことで，現代社会に適合した教科内容構成を開発していくことを目的とする。

研究の方法	ドイツ及び日本の初等教育での授業実践による実証研究と実践に関わる教育関係者へのインタビュー調査である。授業実践による実証研究では，「スポーツによる社会化」を企図した教材として実施する。授業における子どもの形成的授業評価，運動有能感，学級力の変容をアンケート調査により明らかにする。また，ビデオ映像によるゲームパフォーマンス分析によりゲームパフォーマンスの変容を明らかにする。そして，ドイツと日本の子どもの学びの特徴を捉えていき，本教材でそれぞれ「何ができるようになったか」を明らかにすることで教育的価値を検討する。インタビュー調査は，半構造化インタビューをドイツと日本それぞれで授業を実施した教師と参観した関係者に対して実施する。聞き取る内容は「ハンドボールの教材」に対するそれぞれの教育的立場による教育的価値，これまでの教材との比較による「ハンドボールの教材」の評価，改善点「ゴール型教材」を学習していくことに対する課題についてである。ドイツと日本それぞれの特徴を事例的に調査して，その共通点を見出すことで，教材の改善への示唆を得て教材開発への知見とする。
研究の成果	計画どおりにデータ収集を実施することができた。 まず，8月に愛知県の現職教員向けに研修会を実施し，本研究における教材を紹介し検討することで内容を深めることができた。そして，9月にドイツの初等学校，10月から11月にかけて名古屋市の小学校（1校目），11月から12月にかけて名古屋市の小学校（2校目），1月から2月にかけて西尾市の小学校（3校目）で授業実践を行い，アンケート調査およびビデオ撮影を実施した。 また，9月（ドイツ）と3月（日本）に実践した教員にインタビュー調査を実施した。インタビュー調査については8名の教員から延べ300分のデータを得ることができている。 調査の結果については，3月中旬にデータ収集を終えたため現在分析中であり，分析を終え次第論文を執筆し，学会誌に投稿する。